借金お嬢クリス2
42兆円踏み倒してやりますわ

筑摩十幸
挿絵／了藤誠仁

あとみっく文庫

あとみっく文庫／PDF立ち読み版

CHARACTER

龍皇寺(りゅうおうじ)クリス

ジグレットの罠により父を失い、42兆円の負債を負った、龍皇寺グループの元令嬢。武装精霊と合体して、借金返済のバトルへ乗り出すことに。

ガーランド

取り立て人かつ武装精霊として、クリスの借金返済に協力する銀髪の不良少年。

美月(みつき)レイ

クリスに仕える少女メイド。借金のカタに魂を奪われながらも主をサポートする。

厳島(いつくしま)サキ

厳島重工の一人娘。武装精霊の愛猫・タマと合体し、精霊石を奪い合うクリスのライバル。

ヴァネッサ

オージェ財団の総帥。ガーランドをクリスの元に送り込み、ジグレットの討伐を企む美女。

都倉雛子（とくらひなこ）

諸星学園に編入した庶民の娘。クリスに命を救われたことで、彼女たちの戦いに巻き込まれてしまう。

ヴァルチャア

寡黙で何を考えているのかわからない、ヴァネッサの従者。ローブを纏っている。

ジグレット

クリスの父を陥れ、龍皇寺家の財産を奪った異世界人。クリスたちを狙い罠を巡らせる。

これまでのあらすじ

かつてのテロ戦争により崩壊した東京が、巨大隔壁『ウォール』に封鎖されて十年――。
龍皇寺グループの令嬢にして、セレブ御用達の諸星学園生徒会長も務める少女、龍皇寺クリス。傲岸不遜ながらもカリスマ溢れる彼女を、一通の請求書が地獄に突き落とす。
――請求額：四十二兆円。
それは、異世界の住人ジグレットが、クリスの父を陥れ、全財産を奪い取った証だった。
突如、自宅の大邸宅を差し押さえられ、謎の怪物に襲われるクリス。だが、そこに現れた少年ガーランドの協力により、武装精霊と融合した彼女は、圧倒的な力で怪物を退ける。
そして、クリスと武装精霊を引き合わせた目的を語る、オージェ財団の総帥ヴァネッサ。
ジグレットは『ウォール』の内側に存在する異世界への入り口から出現した侵入者であり、異世界とこの世界の秩序を保つためには、侵入者の撃退と、高エネルギーを秘めた「精霊石」を回収する必要があるという……。
クリスは借金返済のため、異世界の住人と精霊石をめぐる戦いに巻き込まれたのだ。さらにネコ型武装精霊を纏う謎の令嬢、サキも現れ、彼女とも争うことに！　エネルギー補給のため、ガーランドとのエッチまでも強いられてしまう、借金お嬢の明日はどっちだ!?

『第一章　デジタル ハート』より

「ほう、あなたはあの龍皇寺クリスですか。ジグレット様への貢ぎ物を探していたところに思わぬ獲物が舞い込んだものです。ジグレット様も、さぞや喜ばれることでしょう」
「うう……お前たちの思い通りには……ハアハア……なりませんわっ！」
「これでもまだそんな口が叩けますかな。ヒヒヒ」
ネズミ男がパチリと指を鳴らすと、強力なスポットライトがクリスに照射された。もちろんそれはあのストリップ光線なのである。
「うあああああぁぁぁぁンっ！」
頭の天辺(てっぺん)からつま先まで、高圧電流を流されたようにピーンと伸びる。網膜から侵入した光が赤い波紋となって身体中に広がっていく。
（だめ……あの光を見ては……）
気づいたときには遅く、細胞一つ一つが火を噴くように熱くなって、肌という肌から汗が噴き出した。手足の感覚が鈍くなりまるで他人の四肢のようだ。
「あ、ああ……か、身体の自由が……きかない……」
かろうじて首から上は動かせるものの、それ以外の部分はほぼ完全に支配されてしまっていた。
『ヒヒヒ。せっかくですから目立つようにステージに上がっていただきましょう。さあ、皆さん。新人ストリッパークリス嬢の登場です！』

再びマイクを持ったバダムが軽妙な口調で盛り上げる。
「うあああっ……そんな……身体が勝手に……」
クリス本人の意志を無視して手足が動き出し、近くのテーブルの上に身体を持ち上げる。そして不安定なヒールで起立すると、両腕を頭の後ろで組んで、綺麗に背筋を伸ばした。
『皆さん、ご覧ください。十代にしてこの完成されたスタイル。スリーサイズは上から八十二・五十二・八十三、Cカップとなっております』
「オオッ。さすがは優勝候補だ。いやらしい身体をしておる」
「ジグレット様が目をつけられたのも頷けますな」
丸テーブルをぐるりと取り囲んだ男たちは、嘆息を漏らして太陽を見るように眩しそうに眼を細める。桃色のエロチックなスポットを浴びせられるビキニ令嬢の美しさは、目の肥えた男たちをも唸らせるモノだった。柔らかさと張りを併せ持つ双乳のライン、絞り込まれた腰からはみ出す剥き卵のような臀丘、健康的で伸びやかな脚線。それらが卑猥な照明によってさらに官能的な輝きを増す。
「ああ……み、見るな……あぁ……見られたら……ンンっ」
足元から抉り込むような視線が全身に突き刺さる。光線の影響なのか肌も敏感になり、見られているだけでゾクゾクと背筋が痺れてきた。これが露出の快感なのだろうか。
『立っているだけではつまりません。クリス嬢の尻振りダンスをご覧ください』

さらに妖しげなBGMまで流れ出し、クリスの身体はゆっくりとリズムに合わせてくねり出す。

右へ左へ、前へ後ろへ、あるいは円を描くグラインドで。クネクネとうねるウェストラインは、強制されているとは思えないほどセクシーなプロ級の腰使いだ。そのくせ表情は羞恥にまっ赤に染まって純情そうなのが、男たちをなおさら昂奮させる。

「ハアハア……こ、こんなことさせて……あうン……後で、ぶん殴ってあげますわよ」

せめてもと男たちを睨みつけるのだが、儚(はかな)い抵抗は歪んだ情念の牡たちをかえって喜ばせるだけだった。

「フフフ。あの反抗的な顔がたまらんわ」

「なかなかいい腰の振り方じゃないか。あれは男を知っている腰の振り方だな」

「まさか？　落ちぶれても龍皇寺の令嬢だぞ。処女に決まっているだろ」

『フフフ、それではお客様方、クリス嬢が処女かどうか、ここは賭けてみますか』

「おお、それは面白い！」

バダムがストリップショーを盛り上げようと提案すると、男たちはすぐに百万単位の金をクリスの処女に賭け始めた。

（なんていう屈辱ですの！　身体が言うことを聞けばこんな奴らに負けませんのに！）

自身の貞操を賭けの対象にされて、屈辱に胸が張り裂けそうだ。

『さあ、脱ぎなさい、クリス。処女かどうか調べてあげますからねぇ』
さらに周りから「脱げ、脱げ」の大合唱。
「いやよ、絶対……あっく……誰が裸になんか……っ」
『わがままな踊り子だ。だが、これではどうですかな』
バシャッ！　ストリップ光線のライトがもう一台追加され、緋色の閃光に脳髄までジーンと痺れた。
「ああ……手が……と、とまらない……うう、悔しいっ」
どんなにイヤだと思っても手が動き出し、肩紐を片方ずつずらしていく。しかもただ脱ぐのではなく、肩をくねらせ腰を振るストリッパーそのものの仕草まで再現させられた。
（ああ、こんな奴らに見られるなんて……っ！）
見知らぬ男に乳房を見られると思うと羞恥に頭がまっ赤に灼け、なぜかパートナーの顔が脳裏に浮かんだ。
（ガーランド……）
まるで大切なパートナーを裏切っているような切ない背徳感で胸が切り裂かれる。しかしその痛みさえも沸騰する露出快感に呑み込まれて溶けていく。
『さあ、もうすぐオッパイが見えますよぉ』
期待を込めた熱視線を突き立てられながら、両手が背中に回る。肩胛骨の間を指先が舞

い、蝶々の結び目を探り当てた。
「ああ、いやいやっ、こんなのいやぁぁっ！」
絶叫だけがホールの壁を虚しく叩き、支えを失った極小のブラはハラリとずれ落ちてしまう。床に落ちたブラを男たちが我先に手を伸ばして奪い合っている。
「おおっ。見えたぞ。あれが財閥龍皇寺グループ令嬢のオッパイか！」
ヤンヤと歓声が上がり、男たちは拍手喝采した。
ツンと上向いた砲弾型の双乳は若々しい魅力に満ちあふれている。汗に濡れた赤い乳首が、高価な宝石のようにキラキラ輝いて視線を集めてしまう。
「見るなっ、見るなって言っているでしょっ！　ああっ、また手が勝手にぃ」
うろたえている間にも白魚のような手指が、ウェストのS字を滑り降りていく。くびれを通過した直後、ビキニショーツのサイドの紐に辿り着いた。そこも蝶々結びで結ばれているだけ。最後の防御にしてはあまりに脆弱（ぜいじゃく）だ。
『脱げ！　脱げ！　脱げ！　脱げ！　脱げ！　脱げ！　脱げ！』
「いやよ……っ！　こ、これだけは……だめ……死んでもイヤなんだからっ！」
全身全霊の力を手指に込めて、いやらしい命令に抗おうとする令嬢。
だが男たちの「脱げ」という命令が頭の中でこだまするたび、脳幹が痺れて次第にわけがわからなくなってくる。筋張って痙攣する指先は、何度もためらいながらついに紐の端

を摘んだ。
『逆らっても無駄ですぞ。お客様の前にすべてをさらけ出しなさいっ』
「こんな……だ、だめぇっ！　いやあぁっ！」
　ついに紐が解かれて、Tバックビキニはただの布切れとなって足元に落ちた。産まれたままの姿を隅々まで鑑賞されながら、気をつけの姿勢のまま指一本動かせない。
「うう、見るな。見るなってばぁっ！」
『ヒヒヒ。踊り子が恥ずかしがっていてはいけませんねぇ。もっとお客様にサービスしなくてはいけません』
「そ、そんなこと……はぁぁう……したくありませんわ……あぅっ」
『ほう、普通の女なら一台のライトで完全に支配できるのですが、さすがは龍皇寺家の令嬢といったところですか』
　唇を噛み締めて抵抗を続けるクリスの姿にバダムは感心したように唸った。
『だが、これでどうですかな！』
　バシャッ！　さらに三つ目のスポットライトがクリスを照らした。えも言われぬ高揚感が突き抜けて、視界どころか思考までも桃色の霞に覆われていく。肌の表面を這い回っていた悦感は次第に深く根を張って、筋肉や肺腑、心臓にまで迫りつつあった。
「うあぁ……わラくし、ストリッパーなんかじゃ……ンはぁ……ラめぇ……っ」

（ダメ……この光を浴びせられたら……逆らえない、わたくしダメになっちゃう）
口ではかろうじて反論するモノの、催淫光線の支配力は今や全身に及んでいた。すっとしゃがみこんで脱いだばかりのビキニショーツを拾うと、観客に向かってぽいっと投げ込んだ。表情も無理矢理ねじ曲げられ、媚びるような笑みを浮かべさせられて。
「おおっ！　お嬢さまの生Tバックや！」「脱ぎたてのホヤホヤ。まだ温かいぞ！」
男たちは大喜びで奪い合い、匂いを嗅いだりしている。さらには裏返しにされて、一番知られたくないクロッチ部分の湿り気まで、暴かれてしまう。
（やめて、見ないで！　匂いなんて嗅がないでっ！）
大勢の男の前で全裸をさらして恥ずかしくて死にそうなのに、口から出たのは真逆の言葉だった。
「クリスの……ぬ、脱ぎたてTバック、皆さんで順番に見てくださいね。はあぁん……エ、エッチなお汁がついてますから……匂いを嗅いだり味を調べてください……ああん」
媚びるようにしなを作っていやらしいお願いをするクリス。
（そんな……口まで……このままじゃ本当にいやらしいストリッパーにされちゃう！）
財閥令嬢の自分がそんな風俗嬢のような真似をさせられるとは、なんという恥辱だろう。しかし惨めな気持ちと裏腹に、身体はクネクネと腰振りダンスを舞い続け、表情もとろけるような笑みを浮かべていた。

『ではご開帳といきますか。処女か非処女か、いよいよ明らかになりますよ』
「特出ししてもらおう。ククク、そこに座って、立て膝を拡げるんだ」
「はあぁはあぁ……は、はい……ご開帳……します」
淫語の意味もわからぬまま男たちに命じられ、淫猥なポーズをとるクリス。ぺたんとテーブルの上にお尻をついて立てた両膝をゆっくりと拡げていく。
「うぅ……あぁぁ……ぃや……ン」
（いやぁっ！　開帳って……まさか……あ、あそこが……見えちゃうっ！）
どんなに逆らいたくても光線に操られた身体は言うことを聞かない。股関節が引きつるほどの大開脚で聖域をあられもなく見せつける。
さらに花弁に添えた中指と人差し指がV字に開いて、サーモンピンクの粘膜を暴き拡げてしまう。観衆は「オオッ」とどよめき、令嬢の股の間に五、六人が鈴なりになって熱い視線を送ってきた。その視線がなぜかゾクゾクと背筋を痺れさせ、目眩を覚えるほどの強烈な快感を呼んだ。熱蜥の滴をポタポタと垂らされているような熱さを感じて腰がピクピク蠢き、そのたびに見られる悦びを秘粘膜に刻み込まれていく。
「ンあぁ……見られてる……わたくしのアソコ……見られてますのぉ……あっ、あん」
「アソコではわからんぞ。もっとストリッパーらしい言葉を使うんだ」
「あ、ああう……オ、オマ〇コ……ですわ……ああっ。クリスは……オマ〇コの特出し

……していますのっ。はぁぁん」

いやらしい言葉を言わされ濡れた薔薇の花のような柔らかな秘園を覗き見られ、得体の知れない快感が背筋を駆け抜けて、クリスはギクンと顎を裏返らせた。視線を意識するほど稲妻のような衝撃が何度も脊椎を灼き焦がし、脳底をまっ赤な火花が直撃する。

『皆さんご覧ください、クリス嬢の特出しでございます。おっと、まだお触れにならないように。果たして処女か非処女か。まだまだ賭けてくださって結構ですよ』

「すごい……全部丸見えだ」

「これが龍皇寺の令嬢のオマ○コか」

目を皿のようにして覗き込む男たち。赤いヘアに飾られた土手の下に、幾重にも折り畳まれた花弁が濡れほころんでいる。桃色の催淫光線を浴びた粘膜はいつも以上に淫らな雰囲気で妖しいまでの色香を放ち、まるで獲物を誘う食虫花のよう。一瞬の静寂が訪れ、ゴクリと唾を飲み込む音まで聞こえてきそうだ。

（ああぅ……見られているだけでオマ○コが……熱いの……奥が……ああ、燃えちゃう）

直接触られていないというのに、ピクンピクンと媚粘膜が浅ましく痙攣して、愛液がジワッと滲んでしまう。それがさらに注目を集め、羞恥の炎に油を注ぐ。

「ふうむ。綺麗な色じゃないか。これは処女でしょう」

「いやいや、見ただけではわからん。女は魔物というからな」

『ではそちらのお客様に調べていただきましょう』
あの髭面の男が先頭に立つ。驚いたことに鼻が象のように伸び、口元には牙も見える。やはりこの男も異世界からの侵入者なのだ。
「わては鼻が利くさかいな。クンクン、匂う。匂うで。いやらしい淫売の匂いや」
「ああ……やめ……ひっ！」
いやらしい鼻が触手のようにくねりながら、クレヴァスをツンツンと突き回す。年頃の少女にとって秘部の匂いを指摘されるのは死ぬほど恥ずかしい屈辱だ。クリスは火が噴き出しそうなほどまっ赤な美貌を打ち振って、イヤイヤと首を振る。
「クンクン、破瓜の血の匂いが残っとるで。それも一ヶ月以内やな？」
「あ、ああう……そ、それは……」
どれほどの嗅覚を持っているのか。ズバリと言い当てられて惨めさと恥ずかしさで心臓がキュウッと縮み上がる。切ない初体験の秘密まで暴かれてしまうのだ。
「白状するんや、お前は処女と違うやろ」
器用に鼻を使って、ピョコンと尖った肉芽をグリグリ擦り上げてくる。さらに秘園の入口をペロペロと舐め回してきた。恥骨に突き刺さる快美電流に感電し、思わず腰が浮き上がった。
「ああっ……わ、わたくしは……あぁう……っ」

鼻先で七色の火花が散り、理性までドロドロに溶かされていく。子宮を焙る淫ら火は、女の悦びを知ってしまった身体に極限の焦れったさも生むのだ。膣襞が何かを求めるように蠢き、後から後から蜜液を湧かせてしまう。

「あ、ああっ！　わたくしは……ク、クリスは……ああ……し、処女では……あうぅ……し、処女ではありませんわっ。はぁうん」

ついに告白させられてしまい、碧眼の縁に涙が滲む。しかし無理矢理作らされた笑顔は崩れず、泣き笑いの奇妙な表情が内心の葛藤を表していた。

『おおっと、どうやらクリス嬢は処女ではないことを告白したもようです！　しかし確定まで皆様投票券はお捨てにならないようにお願いします』

「ほおっ。このお嬢さまが処女でないとは驚きだ。百万すってしまったわい」

「家が没落して、生活も荒れてきたのでしょうな。なんとも破廉恥な娘だ」

少女の秘密を暴き出した昂奮で男たちはさらにギラつく視線をクリスに浴びせた。多くの男たちは処女のほうに賭けていたのか、もっと調べろという声も多い。もっとも賭けの勝敗など淫靡なショーを盛り立てる余興でしかないのだが。

「もっと詳しゅう調べんとな」

象の鼻がヌルリと蠢き、尖らせた先端が膣孔に押し当てられる。クチュッと湿った音がして、鼻先がジワジワと少女の中に沈み始めた。

「お待ちかねだったようやな。中はグチョグチョのトロトロに濡れとるで」
「あ、あひっ！　ンああうぅっ」
火照った秘洞を満たす甘い圧迫感に、クリスはビクビクとつま先を反り返らせた。象鼻はガーランドのペニスと同じくらいの太さがあり、さらに長い。しかも自在に動く柔軟性も兼ね備えている恐ろしい責め具だった。
「クフフ。きめ細かい襞が折り重なって……これはなかなかの名器や。せやけど精霊のザーメンの匂いも残っとるわ。さては初体験でいきなりたっぷり中出しされよったな」
（言わないでぇ！　もう調べないでぇっ！）
身体の奥の奥まで調査され、少女にとって大切な初体験のすべてを知られる惨めさ。舌を噛み切りたいほどの屈辱なのに、涙をこぼしながらも、媚びるような笑みを浮かべたままコクコクと頷いてしまう。膣肉も淫蜜をジクジク湧かせながら象鼻に絡みついていく。
『皆さん、聞かれましたでしょうか。クリス嬢は人外の者に処女を捧げ、避妊もせずいきなり膣内射精されたようです』
「なんといやらしい娘だ。親の顔が見てみたいわ」
「相手は誰でもいいのか。まったく、見た目は高貴なお嬢さまでも中身はヤリマン女だったわけじゃな」
クリスの思い出を穢すように、男たちは次々と罵声を浴びせる。

「お嬢さまのアナルバージンいただきだ。うりゃっ！」
ズイッと男が腰を突き出し、剛棒が窄まりをこじ開けてくる。入念な前戯にとろかされた肛門に、抵抗するだけの力は残されていなかった。
ジワジワと狭い秘道を押し開かれ、括約筋の輪が皺が消えるほど伸びきっていく。男の唾液と先走りをローション代わりにして、剛直がジワジワめり込んでくる。
「んふぅっ！　あ、むああっ、んぎゅう～～～～～～～ンンっっ!!」
ズルンッと一番太いカリの部分が押し込まれた瞬間、あまりの衝撃にサキはビーンとスレンダーな身体を硬直させた。身体が真っ二つに裂けてしまいそうな痛苦に加えて、そんなところで男と繋がってしまったショックに、赤眼の端に涙の粒が光る。
「へへへっ。ついにやったぜ。サキお嬢さまの尻は俺のモノだ」
昂奮にハアハアと息巻きながら肉杭をさらに深く沈めてくる。小刻みなスライドとゆっくり大きな捻りを組み合わせて、桃色の粘膜を掘削していく。
「んぐ……ぅ……あぁぁ……ひっ、ひぃんっ！」
こめかみに脂汗を浮かせて悶絶するサキ。気が狂いそうな苦痛と恥辱だというのに、男たちに弄ばれる乳頭や、触手にしごかれるクリペニからは確実に快楽が忍び込んでくる。どちらか一方だけならこらえられたかもしれないが、苦しみと快楽は紙一重の危うさで相克し、高貴な令嬢の心に被虐の悦びを刻み込んでいく。

「ククク。ケツでぶっといモノをくわえ込んで、どんな気分だ？」
フェラチオを中断し、中年男が訊いた。サキはしばらくゼエゼエと喘いでいたが、
「くっ……貴様ら……許さない！　うう……ぜ、絶対ゆるさないからなっ！　ああぅっ……この変態、はやく抜けっ！　お尻から抜けぇっ！」
眼光鋭く睨みつけ、気丈な台詞で相手を罵倒する。しかし武装精霊の力を奪われ、アヌスに勃起を埋め込まれた状態では虚しい抵抗だった。
「まだ生意気が治らないようですね。これはもっときついお仕置きが必要だ」
ジグレットが残忍な笑みを浮かべると、サキのクリペニスに巻きついていた吸盤触手がヒュンッと鎌首をもたげる。先端にまっ赤なぶ厚い唇が浮き上がり、それがガパッと口を開くと内側には無数の小さな唇と緋色の舌が交互にびっしり並んでいるではないか。
「ひっ！　まさか……」
「これは強烈ですよ。どんなタフな男も一瞬で干涸らびてしまう吸精力です」
「やめろ！　やめ……あきゃああぁぁぁっ！」
ジュブリッとクリペニスがフェラ触手に呑み込まれ、まっ赤な熱蝋を浴びせられたような激感に、サキは魂が消し飛ぶほど絶叫する。
その直後、強烈なバキュームフェラが開始された。
びじゅっぐじゅっ！　じゅぽっじゅぽっじゅぽぉぉぉっ！

「うあああぁぁぁっ!!」

吸引と研磨を兼ね備える吸盤の刺激に、サキはケダモノじみた咆哮を放ち全身を痙攣させた。白目を剥いた童顔が首が折れるほど後ろに仰け反り、ツインテールがバラバラに振り乱れる。

ぢゅぽっ！　ちゅぱっ！　ぢゅぽっ！　きゅぽっ！　ぢゅぽっ！　ぎゅぽっ！

「あひぃぃっ！　だ、だめぇ！　これっ！　死んじゃうぅっ！　あ、ああぁうぉぉっ！」

吸引に合わせて唇触手も上下にスライドし、断続的な快楽パルスが撃ち込まれてきた。合間に甘噛みも加えてきて、苦痛と快楽のちょうど中間を見事に射抜いてくる。

「ひぃっ、あああぁっ……た、たまんないぃっ！　くるぅっ、くるっちゃう～～っ！」

千の唇に吸われ万の舌に舐められるような、これまで感じたこともない牡の悦楽刺激が勃起の中を走るたび、びくんっびくんっとサキの腰が跳ね上がる。それにつれて、クリペニスもビクビクと脈動しスーツを突き破らんばかりに亀頭を膨らませた。

（ああ……なにが……おこってるの……）

お腹の中心がカアッと燃え上がり、何か得体の知れない熱いモノがドロドロと渦を巻いた。焦れったさと気持ちよさが混ざり合いながら、肉棒の内側を這い上がってくる。

「おおおっ、すげえ、締まるぞ」

肛門を犯していた男が悦びの声を上げてピストンを加速させる。痙攣による食いちぎら

んばかりの収斂(しゅうれん)は、少女自身の苦悶をよそに男には極上の快感となった。
ズブッ！　ジュブッ！　ジュププッ！　ズブズブズブッ！
「んあっ！　らめ、らめぇっ……おひり……んぐぅっ！　おひんひんも、おかひくなるぅ、あぁぁ……なにか……あ、熱いのがくるぅ……あ、あぁぁんっ！　も、もれそうぅっ！」
めくり返されては、巻き込まれる肛門粘膜から、魂を堕落させるどす黒い快楽が染み込んでくる。
ズブリと直腸いっぱいに押し込まれて排泄をギリギリまで我慢する狂おしい焦れったさに襲われ、ズルズルと引き抜かれるときにはすべてを許される解放感に魂が蒸発してしまいそう。それを交互に何度も何度も味わわされて、気丈な令嬢も思わず目尻を下げ、うっとりした表情を浮かべてしまう。
（こんな……苦しくって……お漏らししそうになって……どうしてこんな気持ちに……）
灼熱感を伴う肛悦の淫震がクリペニの根元にもズンズンと響き、マグマのような熱い何かが今にも暴発しそうなほど勃起が硬くなる。フェラ触手にくるまれた鈴口からは、はしたない先走りがトロトロと溢れ出し、それをチュウチュウと啜られていく。
「じゃあ、こっちも本気でいくぜ」
再び唇にも肉棒が突き込まれ、激しいイラマチオが令嬢の頭をガクガクと揺さぶる。
「あごぉぉっ！　んむっ、ふぅぅっ……あぁぁ、あむぅんんっ！」

野太い勃起が根元近くまで押し込まれ、食道まで犯される。呼吸もままならないサキは小鼻を膨らませてクナクナと首を振る。

「お前ももっと舌を使え、チュウチュウ吸ってみろ、おらっ！」

普段のサキなら絶対に逆らっただろう。しかしクリペニスの淫悦に狂わされた令嬢は、男に命じられるままに小さな舌をチロチロと肉棒にすり寄せていく。口の中、熱を増していく牡の逞しさを感じると、薄い胸の奥でキュンッと心臓が締めつけられ、乙女の秘奥に新たな蜜を湧かせてしまう。フェラ触手にテクニックを教えられ、令嬢の唇奉仕も急速に上達していく。

「おお、いいぞ。素直になってきたじゃねえか」

「こっちも、グイグイ締めつけてたまらねえ。チ○ポが食いちぎられそうだぜ」

ズッ！　ジュブッ！　ズブズブッ！　ズチュチュッ！

二人の男が前後から激しくピストンを撃ち込んできた。それに合わせて唇触手も徐々にテンポを速めてくる。

「んあっ、ひぃっ、あ、あッッ……ふぅ、むぅ、ああっ、あぁぁぁんんっっ！」

前後から同時に、あるいは交互に男根が突き込まれる。まるで一本の杭で串刺しにされてしまったような錯覚に襲われて、サキはネコ耳の頭を揺さぶり、汗にまみれスーツを貼りつかせた身体を狂ったように躍らせた。お尻に生えた尻尾までくねらせる様は、まるで

発情したネコのようだ。
　口中に広がる塩苦い味や鼻腔に突き抜けるホルモン臭が、男たちの玩具にされていることを実感させ、それが被虐の情感を高ぶらせる。
　処女華をガードするクロッチ部分も、フェラ触手に嬲られ続けるクリペニスの先っぽも、淫ら汗とはしたない蜜でグッショリ濡れ、そのすべてを男たちの眼に透かせていた。
「イキそうなんだろ。俺の臭いチ○ポおしゃぶりさせられて昂奮してるんだろう」
「ぷはぁ……ああ……そ、そんなぁ……」
「隠すなよ。ほれほれ、もうクリチ○ポがピンピンだぜ」
　嘲笑う男が、豪腕でクリペニスをギュウウッと握り締める。
「ンあぁっ！　そこだめぇ！　はあ、ああ……感じちゃうぅ……ンンぁ、くっさいオチ○ポ……ちゅぱじゅぱぁっ、おしゃぶりさせられて……はぁうン、クリチ○ポ、ピンピンに昂奮してるのぉ……んちゅ、れろぉ」
　爆発寸前にまで射精の欲求を高められ、サキは我を忘れて叫んでしまう。口調もいつもの冷厳さを失い、童顔に相応しい幼女っぽいモノに変化していく。
（ああ、オチンチンがぁ……どうすればいいのぉっ）
　肉胴の中を荒々しい射精衝動が渦巻いていた。クリペニスの中に時限爆弾を埋め込まれ、爆発までのカウントダウンが刻一刻と進んでいくような、期待と恐怖が入り混じる。

「尻の穴も気持ちいいだろう。処女のクセして淫乱め」
「はぅっ、お……お尻の穴……き、気持ちいい……ああ、気持ちいいよぉ！」
ズンズンと直腸奥深くを抉られ、サキはギクンとおとがいを突き上げる。肛門から燃え上がる魔悦の火柱が、轟々と火の粉を飛ばしながら少女の理性を焼き尽くす。
「ああっ！　も、もう……らめぇ……何かきちゃうっ！　あああンっ、出ちゃうよぉ！」
舌足らずな声で浅ましいおねだりを繰り返すサキ。日頃の冷徹な令嬢とは別人のような乱れっぷりだ。腰をクネクネ揺するたびアヌスが肉棒をキリキリとしごき、クリペニスが限界を告げるようにビュクンビュクンと跳ね回った。
「うらあっ。お嬢さまのケツマ〇コに注ぎ込んでやるぜっ！　おおおっ！」
ズンと根元まで勃起を埋め込んで男の腰がブルブルッと震える。次の瞬間、
ドビュッドビュッ！　ドプドプドプゥッッ！
ポンプのように拍動しながら大量の白濁がサキの肛門内に撃ち込まれる。
「ンあああぁぁっ！　あ、あぁ、あついぃぃっ！　お尻ぃ燃えちゃう〜〜〜っ！」
熱湯を浴びたような灼熱感で身体が反り返り、四肢がでたらめに痙攣する。左右に振り乱れたツインテールが汗の滴をまき散らす。
「お口にも飲ませてやるぜっ！　おりゃぁっ！」
ドピュドピュドピュッ！　ドクドクッ、ドクンッ！

少女の悲鳴を押し込むように肉棒が喉まで突き入れられる。最も深いところで赤黒い亀頭がわななき、白濁を大量に吐き出した。
「んぐぅっ！　むぐっ、ごくごくっ、あむぁああぅ……ごきゅぅんっ！」
逆らうこともできず、か細い喉を必死に動かして注がれるままに生殖液を飲み干すサキ。熱く生臭い塊が食道を粘りながら降りていき、胃に溜まっていく。
（ああ……せいえきが……）
上下から同時に撃ち込まれた灼熱の矢が、身体の中央でぶつかり合って火花を散らす。そこはちょうど猛りきった淫肉棒の根元だった。
「さあ、出しなさい。あなたの薄汚い欲望を吐き出すのですっ！」
ジグレットの声と同時に、唇触手がクリペニスを根元までくわえ込み、最大の力で吸引した！
「あぎぃいいいいいっっ！」
サキは白目を剥いて仰け反り、金属質の絶叫を迸らせた。稲妻が尿道を駆け下り、乙女の最深部に眠る子宮を直撃する。そこからすぐさま稲妻が放たれ勃起の中の復路を駆け上がっていく。
「あ、がぁっ！　くるぅっ！　ひあああぁぁぁっ！　で、出るぅっ！　出ちゃうぅっ！」
本能的に腰をグンッと突き上げ発射の態勢をとる。勃起がビクビクッと震えた直後、

「あきゃあああああぁぁぁぁぁ――――――――――ッ!!」

プッシャアアアアッ！　ビュルルルルルゥウッッ!!

濃厚な白濁精液が噴出し、フェラ触手の中で渦を巻いた。

乙女の特濃ミルクは黄みがかって粘り気が多く、耐えに耐えたぶんだけ量も多かった。通常の精液を三倍くらいに濃縮したような濃さで、匂いも生臭い。とても清純な少女の身体から放出されたモノには見えないが、そこには大量のマナが溶け込んでいるのだ。

ぎゅぽっ！　じゅぽっ！　ぢゅるるるぅぅぅっっ！

フェラ触手が淫靡な音を立てながら搾りたてのミルクをバキュームしていく。

「あ、あああっ！　飲まないで……まだ出りゅ、ンああぁっ！　飲まないれぇ……出るのとまんないよぉ、あひゃぁン、またぁ、あああぁぁ～～～～ンッ!!」

射精中にも触手にしごかれて、サキはさらなる連続射精に追い込まれていた。熱い塊が尿道の中を駆け上がり、カリの手前で一瞬圧縮されてから弩(いしゆみ)のようにビュクッと放たれる。そのたびに気が狂いそうなほどの快感を味わわされ、サキは押さえつけられた手足をメチャクチャに引きつらせては、総身をガクガクと痙攣させた。

その一発一発が、これまでの人生で培った令嬢の品性を削ぎ落とし、サキを一匹の牝へと変えていく。正義の意志も闘う力も何もかもが吸い取られていく。

「あっ、ああっ、もうらめぇ！　あああぁぁんっ！　イクッ、イクッ、イクゥゥッッ！」

「あ、あ……あぁ……」
（な、なんですの……これは……？）
急に身体が火照り出し、奇妙な昂奮に襲われる。身体の中で何か荒々しい獣が動き出すような、いても立ってもいられない感情の乱れ。
「フフフ。私も今回の件で人間を調べていくうちに気づいたのです。この世にはお金より大切なモノがあると」
動揺するクリスを見つめながら、ジグレットが歌うように語る。
「それは愛です！　時には生命に関する欲望さえも凌駕する。なるほど、ヴァネッサが目をつけたのも理解できる」
「愛ですって……そんなこと……ハアハア……正義の味方が言う台詞よ」
顎をしゃくられても、ほとんど抵抗できない。ジグレットと視線が合うだけで、胸苦しく切ない気持ちになってくるのだ。
「つまり愛情をコントロールできれば、思いのままに相手を操れるということです」
「わ、わたくしに……何を……ハアハア……しましたの……？」
「淫魔は愛と肉欲に飢えた魂の持ち主。その心臓はドーパミンやオピオイドなどの脳内麻薬を精製し、恋愛感情を容易に作り出すこともできるのですよ。ほら、もう胸がドキドキしてたまらないでしょう」

ジグレットが囁きながら唇を寄せてきた。
「うそよ、そんなことで……人の気持ちが……愛情が生まれるはずが……う、ううっ」
なぜか逃れることもできず、そのまま唇を奪われてしまう。
（悔しい……こんな奴に……）
激しい屈辱で頭に血がカアッと昇り、今にも脳内血管が切れてしまいそうだ。しかしその怒りも、チュッチュッと唇を吸われているうちに急速に萎んでいく。代わって、甘くとろけるような高揚感がジワリと胸を熱くする。
「もっと素直におなりなさい、クリス。愛が欲しいのでしょう？　あなたの最も強い欲望が解き放たれる瞬間を見てみたい」
横に添い寝する格好でキスを繰り返し、片手が乳房をヤワヤワと揉み始める。
「はっ……あぁっ！　っくぅ……ううんっ！」
ブラ越しの軽い愛撫だというのに、神経を直接撫でられたような快美感だった。全身の肌が敏感になっていて、ジグレットの細かな手の動きや掌の温もりに、自分でも信じられないほど反応してしまう。その隙を突いてジグレットが舌を入れようとしてくるが、唇を噛み締めて必死に耐え忍んだ。ディープキスもいやだったが、恥ずかしい声をガーランドに聞かれるのも避けたい。
「ククク。無駄なことを」

一旦侵入を諦めた舌は火照った頬を舐め、ナメクジのような跡を引きながら耳へと近づいていく。
「でも、そんなところも可愛いですよ」
「ひぁんっ！」
カプッと耳たぶに歯を立てられ、クリスの脳内に七色の火花が散る。ドキンドキンッと心臓の動悸が速くなる。ニュルニュルと耳たぶを舐めていた舌先が、耳孔に侵入する。
ゾワゾワゾワァァッ！　甘美な電流が鼓膜を突き抜け脳にまで達する。
「あ、あぁぁぁ……ンンっ！　う、うそですわ……そんなこと……ハァハァ……思ってないクセに……」
「愛してますよ」
「ひぃっ！　うそ、あひぃぃんんっ！」
脳を舐め回されているのではないかと思うほどの心地よさで、一瞬頭の中が虚ろになる。愛の言葉を囁かれるたび、心臓は何度もドキドキとときめいてしまう。
（ちがう……こんなの……うそなのに……っ）
眉根をキュッと寄せて、押し寄せてくる幸福感に耐えるクリス。ジグレットの囁きがすべて嘘だとわかっているのに、肉体は密かな悦びを感じていた。
「愛してますよ、クリス」

「うそ……ンああ……うそですわぁ……あああぁぁンっ！」
囁きと同時に熱い吐息をフウッと耳孔に吹き込まれて、クリスはベッドスプリングを軋ませて仰け反った。言葉がそのまま血液中に流れ込み、媚毒のように全身へ回っていく。
被虐の花嫁衣装に彩られた身体はうっすらと汗ばみ、匂い立つような色香を漂わせる。拘束されているわけでもないのに、ロンググローブの両手はシーツを握り締めたまま、憎き男を押し返すこともできないでいた。時折いやいやと首を振るものの、その姿は初夜に恥じらう花嫁そのものである。
フロントホックを外されて、プルンとまろび出た乳房の頂点では、しこった乳首がまっ赤に充血して膨らんでいた。
「クリスも私のことがだんだん好きになってきたようですね」
乳房の柔らかさを堪能した指先が十字の紋様を撫でたあと、お臍を軽くくすぐってさらに降下していき、ついにはシルクショーツの中へと潜り込んでいく。
「あ、ああ……そんなわけ……ないでしょ……ハアハア……いい加減に……あひぃん」
男の冷たい手指に下腹をさすられて、慌てたように太腿が閉じ合わされる。膝小僧をぶつけるほど力を込めているつもりなのに、デルタ地帯に潜り込んでくる指を止めることはできない。
「あ、あ……だめ……っ」

繊毛が掻き分けられ、クレヴァスの上端を優しくなぞられる。キッチリ合わさったワレメが徐々にこじ開けられていく。そこはもう熱い蜜を湛(たた)えていた。
「フフフ、キスだけで濡れているじゃないですか。パートナーがそばにいるというのに、はしたないですよ」
意地悪く見つめられて、クリスは耳たぶまで赤く染めた顔をサッと背ける。ガーランドの前で嬲られて、感じてしまったことが死ぬほど恥ずかしく惨めだった。それなのにガーランドの存在を意識するとますます妖しい昂奮が湧き起こり、下腹が熱く疼いてくる。
「あなたが私のことを愛し始めた証拠ですね」
ニヤニヤ嗤いながら、ジグレットはクリトリスに淫靡なマッサージを送り込んできた。
「はあぁうううう……そこはぁ……ううんっ！」
クルクルと小円を描くように指を回されて、甘酸っぱい気持ちよさに尿道まで痺れて、お漏らししそうになってしまう。
（私……どうなってしまったの……？）
自分で自分がわからなくなり、混乱したまま令嬢は官能の迷路に迷い込んでいく。小さな肉豆をいびられるたび快美の矢が子宮に突き刺さって、腰がクネクネ揺れてしまった。
そんなクリスの反応を、敵が見逃すはずがない。
「貴様はここに座って、クリスがお兄ちゃんのモノになるところをじっくり見るにゃ」

その間にサキは、ガーランドをベッドのすぐ横の椅子に座らせ後ろ手に拘束した。サディスティックな昂奮に童顔を火照らせて、ネコ耳少女はガーランドの肩をツンツン突く。
「うう……クリス……」
意識を取り戻したガーランドがカッと目を見開き、次の瞬間銀髪を逆立てて怒りにワナワナ震えだす。
「貴様、クリスから、離れろっ！　俺のモノに汚い手で触るなっ！」
クリスが淫魔の心臓に操られていることを知らない精霊は牙を剥き出しに吠える。
「ああ……ガーランド……」
パートナーの視線を感じて激しい羞恥に苛まれる。ジグレットの愛撫に肉体が反応していることを知られたくなくて、必死に火照りを鎮めようとするのだが……。
「ククク。野良犬がいくら吠えても怖くもなんともありませんよ。それにクリスの心と身体は、あなたから離れてだんだん私になびき始めたようだ」
非情な中指が秘奥をズブリと貫き、第二関節まで挿入したところでカギ型に曲がる。そして鋭敏な神経をちりばめたカズノコ天井をコリコリと擦り立てた。もちろん押し当てた掌は淫核を圧迫している。
「ンんっ、はぅっ！　そ、そこはぁ……ンっあぁぁ……だめぇっ！」
蜜奥の粘膜全体が燃え上がり、何かを求めるように蠢動する。激しい収縮が蜜液を溢れ

させ、ショーツの底にジュワッと染みができてしまう。
「聞こえるでしょう、このいやらしい音が。君も聞いたことがあるでしょう？」
さらに柔襞を攪拌するように激しく指を動かせば、ぐちゅっぐちゅっと淫靡な水音もショーツの中から漏れ聞こえてくる。
「い、いやぁ、ガーランド、見てはだめ……あ、ああぁん！　聞かないでぇっ！」
激烈な恥ずかしさにクリスは純白ベールを揺さぶって、首を振りたくる。大切なパートナーの前で責められ浅ましく反応してしまう自分に、自己嫌悪を感じてしまう。
「見られてもいいではないですか。私たちは相思相愛なのですから」
「そ、そんなことありませんわ……あ、ああぅむっ」
再び唇を奪われ、悲鳴をくぐもらせるクリス。ガーランドの視線をハッキリ感じるだけに、さっきよりも恥ずかしい。
「あなたは私のことが大好きなのです……ちゅっ……好きで好きでたまらない……」
「ンぁ……うそよ……好きなわけ……んちゅっ……ありませんわ……き、きらいよ……ちゅぱっ……きらい……ですわ……はぁ、あん」
催眠術のように囁かれ、キスを繰り返されるうち、だんだん頭がボウッとしてくる。口では嫌いと言いながら、特に嫌がる素振りもなくキスを受け止め、トロンととろけた瞳がジグレットを見つめている。

トクン、トクン、トクン、トクン！　すでに心臓は破れ鐘を叩くように乱れ打ち、視界に桃色のベールが降りてくる。雲の絨毯の上にいるような、浮遊感に包まれていく。

「あぁんっ！　ちゅぱ……愛してない……んちゅっ……愛してませんわぁ……きらいきらいきらいぃっ……んちゅん、むふん！」

暗示の声を振り払おうと、自分に言い聞かせるように何度も「きらい」と繰り返す。だがそれも、まるで拗ねた恋人が甘えるときの仕草のようにも見えてしまう。

（ああ……からだが……変ですわ）

甘い囁きに大袈裟なほど身体は反応し、ポウッと頬が灼けそうなほど熱くなる。そしてついに唇を割られ、ジグレットの舌の侵入を許してしまう。今のクリスにはそれを押し返す力もなく、唾液をクチュクチュと混ぜ合わされ、ねっとり絡まされた舌を強く吸われて、甘美な電流が延髄にまで突き抜ける。

（どうして……好きでもない男に……どうしてこんなに……胸が熱くなるの？）

次第にわけがわからなくなり、気がつけばクリスからもオズオズと舌を絡めていた。爛れるような昂奮に脊髄が痺れ、呼吸も荒ぶる。

「しっかり見ておくにゃ。目を逸らしたら喉を切り裂くにゃあ」

ガーランドに釘を刺してから、サキもベッドに上がり込み、クリスの脚の間にポジションをとる。シルクショーツの底部は両開きのレースカーテンのようになっており、左右に

拡げると女性器が露出する構造だ。
「もうドロドロのグチャグチャにゃ。キスされただけでこんなに濡らすなんて、お兄ちゃんのことが大好きなんだニャ」
「あぁ……んちゅ……見ないレ……んふっ、むふんっ！」
そこがどんな状態か、自分でもハッキリわかる。蜂蜜を塗り込めたような花弁が、ぽってりと充血して咲きほころび、中心部からはねっとりと濃い牝蜜を溢れさせていた。ジグレットに嬲られたクリトリスも包皮を押しのけて、ピョコンと頭をもたげている。
「うう……くそぉっ！　クリスッ！」
椅子の上で狂ったように身体を足掻かせる銀髪の精霊。溢れる憤怒が陽炎のように空気をゆらめかせた。
「ここに来る前もお楽しみだったようだにゃ。くっさい精霊ミルクの匂いがするにゃ」
「い、いやっ！　言わないで、サキッ！」
わざとらしくクンクンと鼻を鳴らして羞恥を煽る。戦闘前にマナを補給するための濃厚な中出しセックスは必要なことだが、それを指摘されるのはやはり恥ずかしい。
「それも今日でおしまいです。これからこの穴は私専用になるのですからね」
ジグレットがゆっくりと覆い被さってくる。赤黒くそそり立つ巨根は、子供の腕ほどもある長大なモノで、令嬢を戦慄させる。サソリの化け物の凶器に勝るとも劣らない逸物で

ある。

「はあ……はあ……やめなさいよ……そんなもので、わたくしをどうにかできるなんて……考えないことね……はあ……はあ……っ」

しかしそれを見つめるクリスの瞳はドロリと濁り、虹彩の奥には、情欲の炎がチロチロと燃え輝いていた。膣奥が疼き、新たな蜜がじゅんと湧いてしまう。

「私の愛を受け入れるのですよ」

いきり立った肉棒を秘孔に押し当てて、ズイッと腰を入れていく。

「うっ、うぅ……やめ……あ、あぁぁっ！」

無理と思われた蜜襞はゴムのような柔軟性を見せて拡張し、身に余る巨根を意外なほどスムーズに受け入れていく。まるで食虫植物が獲物を呑み込んでいくような妖しい光景だ。

「思ったより楽でしょう。一回バラゾンのデカマラに馴染ませましたからね」

すべて計画通りとほくそ笑みつつ、さらに結合を深くする。鋭い肉槍の先端がズシッと子宮に突き当たり、そこからさらに子宮を持ち上げて最奥まで撃ち込まれる。

「うぐぅ……あ、あぁ……こんなぁ……深い……だめぇ……ンあああぁぁぁぁっ!!」

心を通わせつつある精霊の前で犯されて、恥辱の炎に血肉が焼き尽くされる。それと同時に、淫魔の心臓は悦びに跳ね躍り、お腹の奥には甘い充足感が押し寄せてきた。ガーランドのモノよりも太く逞しい勃起に貫かれて、牝の本能に火がつけられる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

ATOMIC POCKET NOVELS NEW RELEASE

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／690円（税込）

思春期なアダム3
一人泣きの子猫
［小説：さかき傘／挿絵：天海雪乃］

2010年 7月下旬 発売予定!!

全国書店で 好評 発売中

不死の吸血姫がドSのご主人様を募集しているようです
［小説：酒井仁／挿絵：にの子］

「当方Mドレイ希望」
魔界最強のプリンセスがドレイ志願!?

ご主人サマ募集中!!

借金お嬢クリス3
令嬢はいかにして42兆円を返済したか?
［小説：筑摩十幸／挿絵：了藤誠仁］

「…藤田君は責任取るべき」
睦月への想いに身を焦がすマキナ
彼女は夜の教室で……!?

クリス、悪魔堕ち!?
「愛するジグレット様のため、死んでもらいますわっ!」

全国書店で 好評 発売中

既刊LINEUP
全国書店で好評発売中

- ●仙獄学艶戦姫ノブナガッ! ①〜③
- ●絢爛!帝都少女探偵団 赤い謀略を撃て!
- ●BLANGEL 輪になって踊る愚者の夜
- ●借金お嬢クリス ①〜②
- ●プリンセスリバーシ!! 交錯する美姫と魔姫
- ●無敵の姫騎士がM に目覚めたようです
- ●ビルグリムメイデン ①〜②
- ●祝田喰らい節【カースイーター】
- ●魔海少女ルルイエ・ルル

発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431（販売）FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ あとみっく文庫 検索

あとみっく文庫 既刊情報

仙獄学艶戦姫ノブナガッ！
第一次水着大戦

超能力者の少年少女たちが集う特殊な学園――西開学園、北宮学園、聖ジョウント学園。それぞれが仙獄島の覇権を求め、ちょっとHな三つ巴バトルの幕が開ける!!　平和なはずのミスコン勝負は、暗殺騒動が起きたり水着美少女が縄で緊縛されたり触手生物が現れたりで、とんでもない方向に進んで――!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.

全国書店で好評発売中

仙獄学艶戦姫ノブナガッ！ 弐
北宮学園生徒会長選挙戦

絶対的な権力を誇る北宮学園の生徒会長の座を競い、義元、氏康、晴信ら北宮三大美女はもちろんのこと、長尾〈美姫〉景虎、宇佐美〈奈々〉定満といった新ヒロインも加わり、エッチにバトルを繰り広げる!!　敗北したヒロインは勝者の奴隷に!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

あとみっく文庫 既刊情報

仙獄学艶戦姫ノブナガッ！ 参
信玄、出陣！

北宮学園の生徒会長選挙戦も大詰め。肉欲に堕ちた義元と氏康を従えた景虎は、更なる戦力の拡大を図る。そんな中、信玄は元凶である按針を倒そうと信長に協力を求め、聖ジョウントのエリザは封印された化け物を発見する。様々な思惑が交錯する物語は佳境を迎え、信長は姦落の危機に陥るのだが!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.

全国書店で好評発売中

BLANGEL
輪になりて踊る愚者の夜

月下の街を紅に染め上げる、鮮血のサスペンスアクションの幕が上がる! 吸血姫アリシアは異形の生物「被験体」の影を追って戦い続けるが、予想もしない反撃に遭って虜囚の辱めに晒されてしまう!! 『隔月刊コミックヴァルキリー』の長期連載人気漫画が待望の小説化!

小説●夜士郎
原作・挿絵●渡瀬行人

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

あとみっく文庫 既刊情報

思春期なアダム

謎の少年ルシアの手で“蛇眼”の力に覚醒した藤田睦月。世界の半分を支配する秘密を秘めた彼をめぐり、天使と悪魔そして人間による争奪戦が始まった！　ごく普通な少年の日常は一変し、美少女天使のエンジュや憧れの同級生伊部草マキナまで巻き込み、激しくそしてエッチに胎動する!

小説●さかき傘
挿絵●天海雪乃

全国書店で好評発売中

思春期なアダム2 背後をねらう者

「世界の半分を支配する力」を秘めた“蛇眼”の持ち主として、天使たちに保護されたごく普通の少年、睦月。それでも普段通りの学園生活を送る彼の前に、新たな刺客が現れる…。天使・悪魔・人間の三つどもえのバトルはより過熱！“蛇眼”をめぐり迫り来る美女に美少女&美少年(!?)たちの誘惑で、睦月も新たな局面に…?

小説●さかき傘
挿絵●天海雪乃

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

あとみっく文庫 既刊情報

借金お嬢クリス
42兆円耳を揃えて返してやりますわ

異世界の住人・ジグレットの奸計で父を失い、突如無一文となった令嬢クリス。なんとその借金額は42兆円！　クリスは借金取り立てに現れた武装精霊ガーランドの力を借り、ジグレットへ借金返済の戦いを挑むことに！　果たして、傲岸不遜な令嬢はセレブな日常を取り戻し、己の貞操を守ることができるのか!?

小説●筑摩十幸
挿絵●了藤誠仁

全国書店で好評発売中

借金お嬢クリス2
42兆円踏み倒してやりますわ

セレブから無一文に転落したクリスは、借金を返すために今日もバイト&バトル!?　水着コンテストで痴態を晒し、工事現場で肉体労働&ガーランドからの肉体調教と、八面六臂の活躍（?）に加え、ライバルのロリ令嬢、サキも加わり、エッチ&借金バトルはより熱く燃え上がる!

小説●筑摩十幸
挿絵●了藤誠仁

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト http://ktcom.jp/

title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』 トキサナ

『ドSの流儀』 chaccu

『生徒会長前哨戦?』 天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉

電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中!

※18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!